

ミニシンポジウム・交通まちづくり

日時： 2007 年 6 月 9 日(土) 8:50~10:20, 10:30~12:00

オーガナイザー： 原田昇（東京大学），溝上章志（熊本大学）

1. 企画概要

まちづくりの目標に貢献する交通まちづくりについて、その考え方を説明し、先進事例の紹介を行うとともに、主要な研究テーマに関して、パネルディスカッションで論点整理する。第1セッションでは「交通戦略はまちづくりに貢献できるか」と題して、書籍「交通まちづくり」（丸善株）に整理した考え方を紹介し、事例報告をベースに議論する。第2セッションでは「賑わいと回遊性に着目した都心再生」と題して、新しい事例を中心に議論を展開する。最後に、今後の交通まちづくり関連研究の発展のために、ここで明らかにした研究課題を整理し、共同研究の可能性について検討する。

2. セッションの内容と話題提供者

■第1セッション（8:50~10:20）

(1)交通まちづくりとは 原田昇

(2)パネルディスカッション①：交通戦略はまちづくりに貢献できるか

[司 会] 原田昇

[パネリスト] 高橋勝美（財計量計画研究所），高山純一（金沢大学），
谷口守（岡山大学），今西芳一（株公共計画研究所），
高見淳史（東京大学），平石浩之（株日本能率協会総合研究所）

■第2セッション（10:30~12:00）

(3)パネルディスカッション②：賑わいと回遊性に着目した都心再生

[司 会] 溝上章志

[パネリスト] 山中英生（徳島大学），出口敦（九州大学），羽藤英二（東京大学），
安達誠（復建調査設計株），中村文彦（横浜国立大学）

(4)まとめ 溝上章志

3. 話題提供の骨子

(1)交通まちづくりとは 原田昇（東京大学）

交通問題が長年にわたり解決されない原因の一つは、交通計画の目標を交通問題の解決のみに限定するため、本来目指すべき「まちづくり」への貢献、市民活動や経済活動への貢献が不明瞭となり、市民や企業の同意や協力を得ることが困難になっていることにあります。このため、目先の問題への対応に追われがちな交通計画の現状に対して、生活の質の改善や街の活性化など、「まちづくりの目標に貢献する交通計画」への転換が求められています。誇りを持って暮らせるまちづくりは、地方分権社会における都市間競争を勝ち抜くためにも不可欠です。

「交通まちづくり」の実践を通して、それぞれの町にふさわしいまちづくりのビジョンと

それを支える交通システムが構築され、中心市街地の活性化、高齢者が生き生きと暮らせる街、ローカルガバナンスの構築とったまちづくりの重要課題に対して、交通研究と交通計画が具体的に貢献できることが示されると期待しています。

(2.1) 札幌：人と環境を重視し、都心の活性化に寄与する都心交通戦略 ～ 札幌都心交通計画

…………… 高橋勝美（財計量計画研究所）

札幌市は、2001年に将来の都心交通の望ましい姿を「都心交通ビジョン」として市民に提起して以降、検討委員会や都心交通社会実験、市民1000人ワークショップを通じて市民や関係者と議論を重ね、2004年7月に「人と環境を重視するさっぽろ都心交通計画」を策定した。この計画は、都心交通の今後の方向性、計画の目標、そしてそれらを実現するための施策パッケージ（都心を面白くする50の方法）とプロセスプラン、PDCAサイクルから構成され、言わば都心交通戦略と呼ぶべき内容となっている。現在はこの計画を推進するため、国土交通省環境行動計画（EST）モデル事業として、具体的な環境目標の設定、具体施策の展開、モニタリングシステムが検討されている。ここではその概要を紹介するとともに、交通まちづくりを進める観点や国が進める「都市・地域総合交通戦略」の考え方からみた課題等について報告する。

(2.2) 金沢：歩行者・公共交通を中心とした新金沢交通戦略 …………… 高山純一（金沢大学）

金沢市は、これまでいくつもの条例（歩けるまちづくり条例、違法駐車等防止条例、駐車場適正配置条例など）を施行し、「ひとにやさしいまちづくり」を進めてきている。平成19年4月にも全国に先駆けて歩行者・公共交通を優先する「公共交通利用促進条例」を施行し、それを支える新金沢交通戦略の策定を行った。その内容は市域全体を4つのゾーンに分割し、それぞれの地域特性に応じた交通戦略を作成することにより、ひとにやさしい交通まちづくりの推進を進めようとするものである。特に、中心市街地に対応する「まちなかゾーン」では、マイカーがなくても移動可能な極めて高水準のモビリティ確保を目指した施策を展開し、バス事業者に対しても料金低減を求めるなど、かなり積極的な施策を取り入れている。今回は、その概要とその課題について紹介したい。

(2.3) カールスルーエ：土地利用と交通計画の一体化 …………… 谷口守（岡山大学）

近年、持続可能な都市づくりを進める上で、LRTなどの公共交通機関と都市の形態をリンクさせ、特に居住者の視点から見て土地利用と交通計画を一体化したまちづくりを行うことの必要性が説かれている。ちなみにオランダのABCポリシー（業務施設立地対応）は十分に機能せずに既に制度変更が行われてしまっている。現在では、住宅密度のコントロールを意図したドイツ・カールスルーエのABCD方式が個性ある事例として注目を集めつつある。本事例報告では実際にA、B、C、Dのランクに設定されたそれぞれの地区を踏査し、その交通戦略に対応したまちづくりコンセプトが如何に各LRTターミナル周辺において具現化されているかを解説することを目的とする。調査の結果、都市の交通戦略に対応し、地区の階層性をふまえた機能性の高い密度コントロール方式が、まちづくりの手段として柔軟に適用されていることを明らかにした。

(2.4) フライブルク：まちづくりと環境に配慮した交通政策 …………… 今西芳一（株公共計画研究所）

ドイツ・フライブルク市では、街づくりと環境に配慮した交通政策を進めている。この交通政策は、公共旅客交通のネットワーク拡充、自転車道のネットワーク拡充、自動車乗入れ禁止地区の設定、30km/h規制ゾーンによる交通静穏化、駐車場マネジメントを主な施策としている。これらによって、市民の生活の質を向上させ、環境負荷を軽減し、都市の歴史的景

観を保全し、経済の中心地・産業の立地拠点としての地位を強化することが目標である。そのために、大型店の立地規制等の都市計画と公共交通利用推進等の交通計画が連携して、コンパクトシティを実現させる街づくりが進められている。本発表では、フライブルク市の交通と街づくりの一体的な取組みとその成立要因について報告する。

(2.5) ポートランド：長期的な都市圏計画の現在 …………… 高見淳史（東京大学）

米国・オレゴン州のポートランド都市圏は、長期的視点から土地利用と交通の統合的計画を展開してきた代表的な事例として知られる。1990年代前半には、都市圏の住みよさを維持する観点から急増が予測される人口をどう収容すべきかという問題意識のもと、3つの成長代替案を設定して行ったモデル分析や住民の意向調査に基づき、LRTなど高容量の公共交通を軸とする集約型の土地利用が、都市圏の将来像「2040 Growth Concept」として描かれた。本事例報告では、あれから10年あまりが経過したポートランド都市圏の現状と、地域政府・Metroが実施している計画見直しのプロジェクト「New Look at Regional Choices」および地域交通計画の改訂を取り上げ、検討状況と方向性について紹介する。

(2.6) 総論：予防と対処の2種から見る交通まちづくり …………… 平石浩之（㈱日本能率協会総合研究所）

まちづくりに交通戦略が必要となる背景において、事例紹介の都市には特徴が見られる。フライブルグ、ポートランド、カールスルーエ、国内では金沢市、松山市、札幌市は比較的問題が顕在化した初期の段階で改善に着手し、成果を得ているまたは得つつあり、予防型戦略が上手くいっている都市となる。他方、徳島市、福山市などは改善に着手しながらも中心市街地の賑わい低下などでは課題に直面しており、V字回復狙い戦略といえる。後者で成果を得ている先例としては、海外ではクライストチャーチなどもある。交通戦略の導入の効果発現には、市民と共有できるビジョンと目標設定及び管理。それを支えるきめ細やかだが、経年取得に配慮し過度のコスト負担にならない調査手法や指標の蓄積に特徴があり、我が国への適用や改善方向の示唆を含んでいる。

(3.1) 徳島：水辺空間の回遊とにぎわい …………… 山中英生（徳島大学）

徳島の中心商店街であった東新町商店街は、駅前の総合デパート開発につづき郊外の大規模ショッピングセンターの躍進に影響を受けて、昨年食品雑貨のダイエーが閉鎖されるなど、人通りが落ち込んでいる。一方、新町川沿いの空間は緑地整備やNPOによるクルーズ船運行、ボードウォーク整備とパラソルショップなど新しい試みが進められ、独特の回遊空間が形成されている。この状況としくみ、課題について報告する。

(3.2) 福岡市天神地区：社会実験からエリアマネジメントへ …………… 出口敦（九州大学）

福岡市天神地区では、2004年に道路の歩行者専用化とオープンカフェと歩行者天国と社会実験を実施した。社会実験では、歩行者天国化による憩いの空間創出の効果の検証、大型駐輪場の3時間無料化や「押しチャリロード」、一斉清掃の効果などの検証、天神北部の駐車場をフリンジパーキングとし、無料シャトルバスと組み合わせたシステム利用者の行動・意識や課題を明らかにした。その成果を踏まえて、交通事業者、百貨店、商店街、NPO、市役所などが会員となるエリアマネジメントの協議会が2006年春に発足した。九州大学も特別会員である。現在、協議会の行動指針として、交通問題の改善も含めて、平成18年度には憲章を策定し、平成18～19年度にかけて「ガイドライン」の策定を進めている。一極集中傾向にある都心地区で、過密とコンパクトゆえに生じる課題の解決や公共空間および各種施設の利用方法の改善を官民共働により取り組み、都心ならではのライフスタイルを楽しめる都心地区へと再生することを目指している。

(3.3) 松山：歩行者・自転車を中心にした総合交通戦略 …………… 羽藤英二（東京大学）

松山市では、歩いて暮らせるまちづくりを念頭に、中心市街地の活性化策として、坂の上の雲のミュージアム、道後温泉の修景事業、ロープウェイ街の修景事業などの景観事業と、主要幹線の立体化工事やまちづくりエコネットなどのソフト渋滞対策を行ってきた。中心は歩行者に、郊外は円滑な車交通の流れを実現するための交通施策の基本的な考え方を整理し、これらの施策を総合評価するためのPT調査とPP調査を融合した新たな総合的交通調査手法のあり方を示したい。

(3.4) 福山：みんなで考える「交通まちづくり」フォーラム …………… 安達誠（復建調査設計㈱）

福山市では、交通渋滞の発生や利用者の公共交通機関離れ、さらには郊外化の進展による中心市街地の衰退といった問題を抱えている。一方、市中心部では駅前広場再整備や2地区で市街地再開発計画が進むなど、都市再生に向けた転換期を迎えており、交通まちづくりの必要性が高まっている。そのような中、市民の方々のまちづくりや交通問題に対する意識の醸成を目的に、500人規模でのフォーラムを開催した。フォーラムは、事前開催したWSの代表者による提言発表や、携帯電話を使ったリアルタイムでの意識調査など、市民の方が議論に参加・意思表示し、今後の福山について一緒に考えてもらう双方向対話型で実施した。また、フォーラムを一過性のもので終わらせないように、施策への意見の反映に加え、フォーラム参加者から募集した市民を対象に「交通まちづくり勉強会」を継続的に実施している。今回は、福山での一連の取り組み内容とその成果について紹介する。

(3.5) 都心再生と公共交通の役割 …………… 中村文彦（横浜国立大学）

都心再生の鍵のひとつは人通りすなわち歩行者である。その歩行者の流れを支援するところに公共交通の役割のひとつがある。本発表では、諸外国でのさまざまな工夫例を概観しながら、これからの日本の地方都市の中心部を念頭に考えた場合の、公共交通の役割について考察した。都心での歩行者移動を支援する、いわゆる短距離移動支援の無料運賃のシステム、トランジットモールの空間として、そして移動機能としての意味づけ、さらには都心へのアクセスを支援するバスやLRTのシステムについて、郊外住宅地計画、自動車交通や自転車交通との連携も視野に役割を考察する。